



地域医療の拠点として ～附属病院の取り組み～

附属病院では、「人間性豊かな信頼の高度医療」を理念に掲げ、診療、教育並びに研究等を行っています。

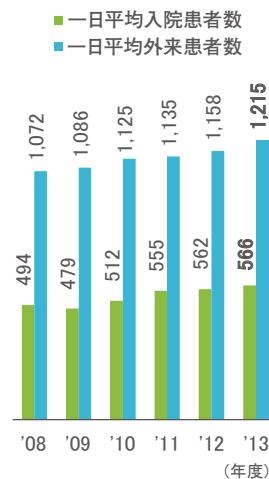
年度計画として「救急部、手術部及び医学部がんセンターの機能強化により山形県のメディカルコントロールセンターとしての機能を拡充する。」を定め、施設の再整備計画の推進、がん診療連携拠点病院としての体制整備等の事業を行いました。

このうち、再整備事業については、平成22年度で病棟の改修が完了。平成23年12月から平成27年3月までの3年4ヶ月間にわたる外来棟、中央診療棟改修（総額約34億円）は、完成に向けて着々と工事が進められております。

平成25年度には、疼痛緩和医療部の設置やコメディカルスタッフの増員を実施し、医療体制強化を図ったほか、在宅医療・在宅看護技術の均てん化と質の向上を目的とした「医学部在宅医療・在宅看護教育センター」、先端分子疫学研究所を発展させ、戦略的に分子疫学研究を推進するための「医学部メディカルサイエンス推進研究所」を設置しました。

また、これまでがん医療の充実を目的として放射線治療装置（リニアック）、放射線診断装置（PET-CT）を導入してきましたが、東北地域のがん医療のさらなる高度化を目的として、重粒子線がん治療の導入を目指しております。重粒子線がん

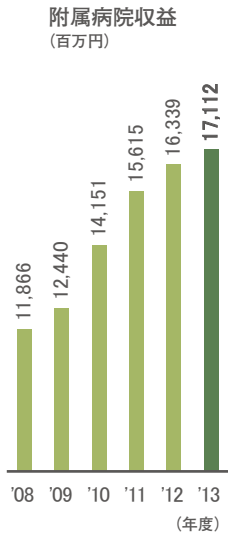
附属病院患者数推移



治療とは、体外から炭素イオン線を照射して、がん細胞の遺伝子を破壊する放射線がん治療で、従来のX線・ガンマ線と比較して患者の身体的な負担が少なく極めて短期間で社会復帰が可能です。

山形大学は、北海道・東北地区で初めての導入を目指しているところですが、平成24年度に引き続き、平成25年度補正予算にて、その研究開発費として更に約10億円が盛り込まれ、実現へ向けた動きが大きく加速しました。今回の予算で行うプロジェクトは、現在、大量の電力を必要とする重粒子線がん治療装置について、電力消費をより低く抑えるための技術を民間企業と共同で研究・開発するというものであり、東北全域における患者さんの利便性を考慮した広域的な患者ネットワークシステムの構築もあわせて取り組みます。

今後、高齢化がますます進み、がんに罹患する患者が更に増えることが予想されます。国民病であるがんの治療のため、医学部の知を集結し、がん研究及び診療に取り組んでまいります。



大学運営の充実に向けた施設整備

山形大学では、大学を利用する学生、教職員のために、教育研究機能の充実や、耐震化などによる安全、安心な環境づくりのため、さまざまな施設の整備を行っています。

平成25年度は、施設整備費補助金による医学部総合研究棟（臨床系）、附属特別支援学校の再整備が完了したほか、教職員の就労と子育ての両立を支援する目的で目的積立金により小白川キャンパスに保育所を整備し、平成26年4月1日に開所しました。

そのほか、外部資金により工学部に蓄電デバイス開発研究センターが整備され、産学連携の研究拠点となることが期待されています。

工学部 蓄電デバイス開発研究センター 外観



小白川キャンパスのびのび保育所

